

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「アジア文字研究基盤の構築 1：文字学に関する用語・概念の研究」（平成 29 年度第 2 回研究会）

日時：平成 29 年 10 月 7 日（土曜日）午後 13 時 30 分より午後 17 時、10 月 8 日（日曜日）午前 8 時 30 分より午後 15 時

場所：AA 研マルチメディア会議室（304）

報告者名（所属）

10月7日

1) 荒川慎太郎（AA研所員）

「プロジェクトの進行状況について」

(On the joint-research project)

昨年度（平成 28 年度）関わった課題の成果刊行物を紹介するとともに、本課題の目標とする成果物について試案を示した。

2) 永井正勝（AA 研共同研究員，東京大学）

「古代エジプト聖刻文字—字形と構成の特徴—」

(Ancient Egyptian Hieroglyphs: Characteristics of the shapes and the structures)

古代エジプトで使用された聖刻文字の字形，語の表記法，文字配列の特徴を概観した。聖刻文字は子音文字（アブジャド）に属しており，環境によって表音的声符，表語的声符，限定符（意符）のいずれかの用法を担う。そのうち表音的声符としての用法が中心を占め，表語的声符としての用法は極めて少ない。語の表記法では仮借と形声の原理が多く，語を単位として分析をした場合，漢字の六書との共通点が見られる。聖刻文字は，読む順番に従って線状に配置されるわけではなく，字形や書字材料のスペースに応じて方塊升を隙間なく埋めるように配置される。いわば，ジャスティフィケーションやタイポグラフィーが採用された文字配列であった。

3) 森 若葉（AA 研共同研究員，国士舘大学）

「楔形文字—字形と構成の特徴」

(Cuneiform script: Characteristics of the shapes and the structures)

世界最古の文字の一つとして知られ，古代オリエント世界で広く，3000 年以上粘土板に記された楔形文字の特徴を概説した。楔形文字は，シュメール人によって紀元前 4000 年紀後半に作られた。その後，アッカド語やヒッタイト語をはじめ多くの言語に採用され，文字はそれぞれの言語に応じて変化を加えられた。このシュメール系楔形文字は，表語文字と音節文字からなる。その字の成り立ちおよび構成を漢字の六書と比較対照し，楔形文字に特徴的な字の構成等を紹介した。

10月8日

4) 全員

第3回研究会の企画構成と，本課題の成果公開，特にHPに関する打ち合わせを行った。

5) 町田和彦（AA 研共同研究員，東京外国語大学名誉教授）

「ブラーフミー文字の謎」

(Some Mysteries of Brahmi Script)

インド系文字の祖であるブラーフミー文字（前 3 世紀の中頃）に関する，いまだに解き明かされていない起源にまつわるいくつかの謎について紹介した。また文字類型論上いわゆるアブギダに分類されるブラーフミー文字の音声表記システムが，アショーカ王碑文に出現する音節文字単位の頻度の統計結果をもとに，中期インド語派特有の音韻構造にはいたって合理的かつ効率的であることを説明した。

6) 岡田一祐（AA 研共同研究員，国文学研究資料館）

「古平仮名の軌跡（900-1900）」

(An outline of Old Hiragana (900-1900))

平仮名が 9 世紀に誕生して，1900 年に現代のかたち統一されるまでの期間を古平仮名の時代と名付けて，その通史，音節文字としての特徴などを概観した。古平仮名は，それ以前の漢字を借用した日本語表記に由来するが，そのもともとの借用が行われた時点と，それ以後には音節構造におおきな変化が生じており，革新形を平仮名で記すためにどのような工夫が行われたのか，通史の形式で紹介した。また，平仮名がどのように音節を表記していたのか，また平仮名字体同士の関係はどうなっているか，日本語表記全体における漢字への依存度について簡単に議論した。

それぞれの発表に関して、参加メンバーの専門とする様々な文字の見地から、自由かつ活発な討議が行われた。